

## Interview mit TN09 (12.07.2017)

Q : 最初に教師として、ドイツ語を教え始めたのはいつでしたか？

A : ドイツ語教員養成講座を受けてる、ちょうど一年目が終わった時期あたりに、\*\*の方でドイツ語の初級のオファーがあったので、2012年だったと思います。

Q : 教員養成講座の方が、先？

A : 先です、はい。2011年から2013年だったと思うんですね。

Q : なるほど。そうすると教員養成講座の時はまだ教えた経験がなくて。

A : そうですね、ドイツ語はなかったです。自分の専門科目の方はいくつか持ってたんですが、ドイツ語はなかったです。

Q : 専門科目は、何を当時教えてらっしゃいましたか？

A : ドイツ史でした。

Q : ドイツ史の講義をお持ちだった？

A : はい、講義です。大教室での講義でした。

Q : 最初、ドイツ語を教え始めた頃の経験のことを振り返ってみると、どのように最初は感じていらっしゃいましたか？例えばこういうことは自分には向いているしできるけど、こういったことは難しいとか、そういうことを思い出していただけますか？

A : あの、ちょうど養成講座一年を終えた段階で、その知識がまずあったので、私が受けた教育っていうのはまったくの文法教育と講読の教育だったのですが、それだけでは物足りないなっていうのは自分でも思っていて、グループワークであるとか、あと学生さんに主体的にやっていただくとか、そういうこともいろいろ取り入れようと、ちょっと意気込んでお受けしたんですが、その大学の授業方式というのが、統一教科書を使って、皆一斉にだいたい同じ進度で同じ教科書を使って進むというので。文学部だったんですけども、使ってる教科書も一応は総合教科書の体裁だったんですが、文法内容が非常に詳しく記載された、結局は文法を中心に、まずは文法を先に理解していただいて、という形の教科書だったので、最初はいろいろグループに分けたりして、会話練習とかして、教室中を動き回ってということをやっていたんですが、2か月ぐらいすると、他の先生方との進度が遅れ気味になってきたのと、でやっぱり、進まないで統一テストを期末に控えてましたので、最後の方はやっぱりもう、文法をガンガンいくぞというような形になって、自分で思ったのとはちょっと違う形になったかなという感じです。

Q : なるほど。そうすると教員講座で先にいろいろなことを勉強したけど、実際にそれがこう、現実にはなかなか実現しにくかったという状況ですか？

A : そうですね、自分でも最初のうちはちょこちょこ取り入れてみたりして、ああ面白そうだなとも思ったんですが、いかんせん、進度、ものすごくスピードが速かったんです。一年生の10月でもう、ほとんどの文法事項は全部終了させるっていう、すご

く進度のはいカリキュラムだったので。最後の方は文法中心になってみんなでガンガン進むって感じでした。

Q：そういった習ったこと、養成講座で学んだことと、現実の授業とのギャップってのは、今でも感じる場所はありますか？

A：それがですね、今は学校が変わりまして、今受け持たせていただいている学校が2校あるんですが、一校の方は、コミュニケーション・アプローチを中心とした授業を自由にやってください、ということだったので、そちらの方の大学ではわりと自分が思うような教科書を選んで、グループワークを中心にして、しかも運用を中心にご覧くださいとのことだったので、こちらの大学ではほんとに教員養成講座で教えていただいたことがものすごく役立ってまして。

Q：それ本務校の方ですか？

A：いや、私はまだ本務校を持ってなくて、非常勤なんですけども。そちらで3コマ受け持たせていただいているのですが、3コマもそれぞれ内容が少しずつ違うのですが、必修の科目が一つと、選択科目のドイツ語コミュニケーションというのと、あとは再履修のクラスなんですけど、それぞれの学生さんのご要望に応じて、いろいろ工夫も自分なりにできるということで、今も試行錯誤中なんですけども。でも教科書もコミュニケーション・アプローチの教科書を使って、意外とみんなで楽しくさせていただいてるって感じです。

Q：もう一つの学校の方はどうですか？

A：もう一つの学校の方は、こちらは専任の先生の担当授業と非常勤の講師の方でまったく、カリキュラムも違ってまして、専任の先生の方はドイツの Klett 社のコミュニケーション・アプローチの分厚い教科書を使って、ドイツ語で授業をするというようなもので、週3回かな、で本格的にやる分で、非常勤が受け持たせていただいているのは、総合学習という形で週2回なのです。で、そちらの方は学生さんがコミュニケーションよりも、どちらかというと文法を中心にやりたいという学生さんが、どうも選択されるということなんで、わりと文法もやらないと、学生さんのご要望にそわないっていうような形なので、私は今のところその大学では、総合教科書を使って、会話練習とそれから文法を同時並行でやっています。

Q：ご専門はドイツ史で、ドイツ語教師としての仕事も同時にされていて、その研究活動とドイツ語教師の仕事の関係については、どういうふう感じてらっしゃいますか？

A：私のドイツ史の方の専門は、歴史なんですけれど、言説分析と申しまして、特定の人物の書いた書物であるとか、雑誌記事、新聞記事それから手紙といったものを、その時代背景と照らし合わせて分析するという手法なので、やっぱりドイツ語がすごく大事ですし、当然のことながら。で私が育った大学院の環境が、ドイツ文学の先生がほとんどで、ドイツ史とドイツ語が密接に結びついている環境で育ったので。で、みんな周りはドイツ語の言葉そのものにもものすごく思い入れを持っている人が多かったの

で、私も当然のことながら関心もありまして。それにちょっと自分の力が追いつかない、ということでドイツ語教員養成講座も受けさせていただいて、で今も勉強中というところなので、ドイツ語の勉強そのものも、教授法そのものも、ドイツ史の研究の方には何らかの形で役立っていると考えています。

Q：ドイツ語教員養成講座に参加されようと思った、きっかけってというのはありますか？

A：非常勤のオファーがそろそろ来そうだなっていう形があったのと、何かの非常勤のオファーがあるときはやっぱりドイツ語の授業が圧倒的に多くて、コマ数から言いますとドイツ史の非常勤の口ってそんなに多くありませんで、私の場合はドイツ語の授業は、もし来た時にお引き受けするにしても、ちょっと危なっかしいなって自分で思いまして、勉強しといた方がいいかなと思って入ったという形です。独文学会にも私、入っておりますので、連絡をいろいろ頂いておりましたので、メーリングリストで新規募集というのもその時目に入ったものですから。それで受講させていただきました。

Q：受講するにあたって、どんなことを期待されておりましたか？

A：実はその、それまでにやっていたドイツ史の大教室での講義形式の授業がですね、もう二年ぐらいやってたんですが、いかんせん、教壇からマイクで話す形式のもので、やっぱりそれだと、学生さんになかなか伝わらないなっていうのがあって、ひしひしと感じておりました、目の前でガーッと寝られるとか、話も面白くないんだろうなと思いつつこっちは話すという感じで、教えるっていうことはまた別のフェイズだな、講義を持つ、講義を運営するということが、研究とは別のフェイズだなっていうのを自分でも感じてまして。ドイツ語教員養成・研修講座ということなので、そちらの方にも何らかのいろいろ参考になる内容を勉強できるんじゃないかなと思って、申し込んでみました。

Q：その期待ってというのは、講座に参加してみて満たされましたか？何か具体例があればお聞かせいただきたいのですが。

A：そうですね、やっぱり学生主体でやるというような方式であるとか、採点をどこまで訂正するか、であるとか、それから後グループワークの仕方は大変勉強になりました。特にジグソー方式という、\*\*先生が教えてくださったかと思うんですが、あれはいろんなところで今活用させていただいています。

あと、学生さんに教材やワークの実践の提示をするときに、どういう順序で、どういうお膳立てをして提示をするかっていうことも、非常に勉強になりました。読み書きっていうのも、やっぱりドイツ史の方でも史料を読むとか、それを分析するとか、いろいろあるんですが、応用できると思っています。

Q：で、教え始めた最初の頃と比べて、教師としての今のご自分をどのように評価されますか？

A：以前ですね、例えばドイツ語の初級であった場合は、学生さんはまったく知らないところから始められるわけで、講師側と学生さんとの間で、知識の圧倒的な差があるわ

けで、もうこれは、こちらから情報をガンガン提供して、ドイツ史なんかもそうなんですけど、授業を進めていくっていうのが頭の中に漠然とあったと思うんですが、今例えばコミュニカティブ・アプローチで三コマ持たせていただいているところなどでは、やっぱり学生さんと一緒に輪の中に入ってやるって言いますか、前は教壇に立っていたんですけど、今はどんどん机間巡回と言いますか、ほとんど座らない、いつもみんなの中に入って、相互に言葉を交わすっていう時間が圧倒的に増えたかなと思います。で、言葉のこういう使い方があるよ、とかっていうのを、やっぱりみなさんにもやっていただいて、すぐにはできないところを、いろいろ覗き込みながらとか、また向こうからも問いかけてもらいながら、そういう相互のつながりに多く時間を割くようになったかなと思ってます。

Q：昔よりも今の方がうまくできるようになった、っていうことはありますか？

A：学生さんとの距離が近くなって、やってる自分もなんていうか、いろいろ手ごたえを感じながら、楽しさが増したかなっていう感じはします。提示の仕方も一方通行じゃなく、まあ時々はそのようなこともあるので、いろいろ反省はするんですが、一方通行じゃなくて学生さんの声にも耳を傾けるようになったということは大きいと思います。

Q：逆に、こちら辺については、これからもっと伸ばしたいとか、そのためにはこんなことをしていきたいっていうようなことはありますか？

A：ドイツ語の授業に関しては、コミュニカティブ・アプローチの、学生さんがまずいろいろ会話をして、いろんなパターンを自分たちでペアワークであるとかグループワークで練習をしながらやっていただいて、そのあとそれがどう定着をするのかっていうところを、どう授業で示唆したり、また実践で学生さんたちにどのようにわかっているのかっていう、その先の話であるとか、コミュニカティブ・アプローチの、コミュニケーションの授業でもちよっと力がついてきた人たちに、それをどう発展させていくか、どう定着させていくかとか、そうした授業展開が、自分はまだ十分じゃないのかな、と思ったり。自分自身がまだドイツ語を学生さんと話しながら的確にこう、学生さんが望んでいるところもスパッとこう、タイミングよく言葉をはさんであげたりとか、やっぱりそこら辺はまだまだ、できてないなって思います。

Q：学習者のその後の発展を伸ばすとか、今おっしゃったような、もっとも自分としては伸ばしていきたいことを実現するための、具体的な刺激を講座から得られたりしましたか？

A：講座の方では、私みたいに知識が最初あまりなかった人間にとっての入口と、それから方向性を、そうした情報をたくさんいただいたということで、ものすごく勉強になりました。ただその時まだ授業をあまり数多く持っていなかったもので、実際自分がやってみて、個々にぶちあたる疑問点って言いますか、そうしたものはやはり自分でまたその都度、その時のいろんな研修会であるとかワークショップに行つて、情報を得た方がいいんじゃないのかな、というふうに思っています。なので、長期の休みの間

によく行ってるんですが。

Q：研修講座のあと、その後どんなその他の研修会やワークショップに参加されましたか？

A：ドイツ語教育部会で定期的に行われるワークショップがございますよね。あれには何回か行かせていただいています。あと、よく\*\*先生とか、当時教えていただいた研修講座の先生方が個別に開かれる科研のシンポジウムだとか、そういったものには、時間が合えばわりとよく参加させていただいていますし、それがまた結構その時に自分が困ってたものと合致するものがありまして、いろんな情報を得て、それで随時取り入れていくという、そういう形です。あとゲーテと教育部会で募集されている、夏休みにドイツで教員向けに研修がありますが、あれも将来的には行かせていただきたいなと思っています。夏休みの、いろいろコースがあるやつです。

Q：それから、最後に二つ質問なんですけど、こういう授業を展開できるようになりたいとか、よい授業についての、こういうのができるようになりたいなっていうイメージをお持ちですか？将来的に、こういうふうに授業できるようになりたいとか。

A：将来的には、今もちょっとずつ授業内ドイツ語っていうのも時々使ってはみるんですが、やはりもう少し授業でドイツ語を自分も使って、でも日本人らしさ、日本人としてドイツ語もこうやって使えるんだよっていうことも示しながら、私がドイツ語を使うことによって、みんなにドイツ語を話すっていう壁をちょっと低くしていただいて、授業を運営していくということと、もう少しコミュニケーションの、言葉そのものにどっぷり飛び込んでいって、それを、ほんとにコミュニカティブ・アプローチの真髓だと思うんですけど、前に\*\*先生が内在的文法っておっしゃってたんですけど、そこをもう少しみなさんにわかっていただきたい、こちらの提示の仕方もちろん悪いんで、まだわかっていただけてないなっていうのがよくあるので、そこら辺うまくみなさんに伝えて、親しんでいただきたいと思っています。

Q：最後のもう一つの質問というのは、ドイツ語教師としての自分の未来像といますか、こういう教師になりたいとか、理想の教師像といったものは、これも将来的な方向で考えていただけていいんですけども、そういうものはありますか？

A：教員養成・研修講座に通わせていただいてから、よく考えるようになったのが、語学教育というのは、市民社会の中の一員として、社会的に育つための礎になるのかなっていうことと、EUの教育指針であるとか、そういうのも勉強させていただいて、異なる文化を理解するとき、同じテーブルにつくための準備であるということです。そうした面も学生さんに伝えながら、一緒に考えながら講師側の方は伴走する形で、学生さんの考える力を伸ばしながら、言葉の力も付けていくっていうような、そういう授業が、そして多様な文化に接していく、その礎みたいなのを学生さんに理解してもらおうような語学学習っていうのができたらいいなっていうのは思っています。

Q：じゃあ、そういうことができる教師になりたいっていう？

A：そうですね、まあそれはドイツ史もそうなんですけれど。

Q : ありがとうございます。今日のテーマが、教師としての自己像の発展ということなんですけれども、こちらから用意した質問は以上なんです、そのテーマに関してだったらこのことをまだ言っていないけど、ぜひ話しておきたいって補足されたいことはありますか？

A : 自己像の発展ということでは、発展は限りなくと言いますか、毎回授業をやっているといろんな学生さんがいらっちゃって、たぶんドイツ語教員養成講座を取っていなかったらとても対応できなかったこともあって、取っておいて良かったなって思うんですけど、でもそれプラス、まだまだ勉強しなければいけないなっていうところがあって、私なんかはまだまだ発展段階だなと痛感していますので、もうちょっと、ほんとはもっと時間をかけてやりたいんですけど、自分の研究の方もありますので、今二足わらじでちょっと苦しいなって感じです。でもまあ、どっちともとりあえず、とにかく続けて行こうかなとは思っています。

Q : どういうふうに自己研鑽を積んで行こうかなって思いますか？まあ、さっきのこととちょっとかぶるかもしれないですけど。

A : 自分の力をつけるということ、もっと自分のドイツ語力とか、授業の提示の仕方とかそういったスキルも付けていくということと、あと研修講座で授業参観をさせていただいたんですが、授業内ドイツ語を使う授業でしたが、\*\*先生の授業だったんですけども、その一回きりで初級の授業だったので、中級クラスの授業参観っていうのもさせていただきたいなと思っています。機会があれば、もうちょっと時間ができたら、またいろいろお願いしようかなと思っています。

(中略)

A : いろんな先生が休みのたびにワークショップとかシンポジウムとか開催していただいているので、とても勉強になってまして、今年の春休みも2、3回ほど関西関東、両方行かせていただいたんですが、その時にいろいろ自分で問題を抱えてたんですけども、それに対する答えがさまざまな方向から得られて、4月からそれをまた反映することができて、さらにそれがちょっとでもうまくいくと嬉しくて、少しずつでも改善していこうかなと思っています。だから先生方もお忙しいとは思いますが、またどうぞよろしくをお願いします。